



Title	芦田恵之助「呉鳳」の授業：昭和5年10月
Author(s)	吉原，英夫
Citation	札幌国語研究，2：63-76
Issue Date	1997
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2609
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

芦田恵之助「呉鳳」の授業

——昭和五年十月——

吉 原 英 夫

はじめに

昭和五年十月に小樽市緑小学校で開校十周年記念式が挙行され、芦田恵之助は緑小学校校長の沖垣寛から招かれて参加した。芦田はこの時のことを『芦田自伝』下巻（実践社、昭和四十七年七月）『芦田恵之助国語教育全集』第二十五巻、明治図書、昭和六十三年。以下『全集』と略す）の「緑十周年」に記している。また、沖垣寛はこの時の芦田の授業と講演を沖垣資料287「まこと」（北海道教育大学附属図書館所蔵）にメモ風に記している。それらによると、この時の芦田の日程は次のようであった。

- 十一日 小樽到着。
- 十二日 緑小学校開校十周年記念式に出席。祝辞。
- 十三日 午前、札幌市東橋小学校で「道ぶしん」の授業と講演を行う。午後、緑小学校の記念音楽会に出席。

- 十四日 緑小学校で「揚子江」の授業を行う。
- 十五日 緑小学校で「揚子江」の授業を行う。
- 十六日 緑小学校の記念研究発表会で「呉鳳」の授業を行う。参加者二百名。

- 十七日 小樽市教育会で講演を行う。
- 十八日 午前、緑小学校で「呉鳳」と「クリヒロヒ」の授業を行う。午後、定山溪へ。

- 二十日 小樽出発。

芦田は「昭和の御代にはほころべき一つの芸術品」（芦田の祝辞の中の言葉。沖垣資料287「まこと」による）という小樽市緑小学校において、十月十四日と十五日には「尋常小学国語読本」巻八の「揚子江」の授業を行い、十六日と十八日には同じく巻八の「呉鳳」の授業を行った。沖垣資料20「揚子江と呉鳳」（謄写印刷十七枚。北海道教育大学附属図書館所蔵）は、芦田のこの授業を記録したものである。本稿は沖垣資料20「揚子江と呉鳳」に基づき、昭和五年十月に行われた芦田の「呉鳳」の授業

について考察を加える。

一

まず、教材の「呉鳳」についてふれておきたい。「呉鳳」は『尋常小学国語読本』巻八に収められている。

第六 呉鳳

台湾の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、阿里山の蕃人にだけは、此の悪い風が早くから止まりました。これは呉鳳といふ人のおかげだと申します。

呉鳳は今から二百年程前の人で、阿里山の役人でした。たいていそう蕃人をおかいましたので、蕃人からは親のやうにしたはれました。呉鳳は役人になつた時から、どうかして首取の悪風を止めさせたいものだと思ひました。ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十余ありましたので、それをしまつて置かせて、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

四十余年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。呉鳳はお祭の為に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせて、もう一年、もう一年とばさせてゐましたが、四年目になると、「もう、どうしても待つてゐられません。」といつて来ました。呉鳳は「それ程首がほしいなら、明日の昼頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」といひました。

翌日蕃人どもが、役所の近くに集つてゐますと、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が来ました。待ちかまへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは呉鳳の首でございました。蕃人どもは声を上げて泣きました。

さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

以上が教材「呉鳳」の全文である。『尋常小学国語読本』巻八編纂趣意書の「教材出処摘要」には「呉鳳」は通事呉鳳（中田直久著）」とある。

この教材について、『尋常小学国語読本』の編集に携わつた八波則吉は『読本中心国語の講習』（教育研究会出版、大正十一年四月）の「第十二講 第四学年の国語教育（下）」の「純真の熱愛」において、

中田直久氏著『通事呉鳳』に拠つたのですが、此の本はちよつと手に入りかねる本です。但し呉鳳の事跡は台湾の事を書いた本には、大抵一通りは出てゐるほど名高い話です。

呉鳳は……たいそう蕃人をおかいましたので、蕃人からは親のやうにしたはれました。

人を取つて食ふとさへいはれてゐる蕃人でも、心から「かはいがら」れば親のやうに「したひ」ます。「心と心」の感応です。

と述べている。

私は中田直久『通事呉鳳』という本を見ていないが、新田寛編『小学国語読本原拠集成』（厚生閣、昭和十二年十一月）に教材「呉鳳」に関する箇所が収録されている。

これによれば、死に赴く前夜、呉鳳は家人に向かつて、

紙人の刀を持ち馬を躍らし、手に蕃人の首を提ぐる子の像を作り、之を柩前に焚きて、当に颯言して云ふべし。呉鳳半生蕃人の馘首の残暴を革めんと欲し、百方論説するも聴かず、恨を呑んで死せり。其の靈天に訴へ、災殃を蕃社に降して子遺なからしめむ。

と遺言する。翌日、蕃人は赤い着物を着た人の首を取り、それが呉鳳であることを知って、「喫驚して躊躇し、終に屍を棄てて却去し去る。蕃人は「何故に人を与へんと約し、呉鳳が自ら他に代りて死せりや。」との謎語を解く能力を欠いた。ちょうどこの時、「疫癘大いに起り、死する者日に十を以て数ふるの惨状」が生じる。そこで、祈祷師に占ってもらうと、「是れ通事呉鳳を殺せる天譴なり。今此の殃責を免れむと欲せば、宜しく呉鳳を祀りて其の靈を招降し、将来清人を殺さざるの誓を立つべし。」と言う。そこで、蕃人は呉鳳を祭り、人を殺さないことを誓った。

すなわち『通事呉鳳』においては、呉鳳は「天譴」ということによつて首取りを止めさせようとし、たまたま「疫癘」の流行があつてそれが成功し、蕃人が首を取ることを止めたことになつている。

『尋常小学国語読本』の編集者はそれを呉鳳と蕃人の「心と心」の感応」というように書き換えたのである。

なお、この「呉鳳」は『小学国語読本』巻八にも引き続き収められた。ただし、文体が敬体から常体に変わり、分量も増加している。

『小学国語読本』の編集に携わつた文部省図書監修官井上超は「新読本巻八編纂精神並に解説」（『同志同行』第五卷第八号、昭和十一年十一月）において、教材「呉鳳」を「説話教材」に分類し、「『呉鳳』は日本の内地から一步出た台湾の昔語り」と位置づけている。

二

芦田の授業を紹介する前に、大正十五年に芦田が「呉鳳」の取り扱いについて述べた記録があるので、それを示しておく。

芦田は大正十五年一月四日に青森師範学校で講演を行い、その中で「呉鳳」の取り扱いについて述べた。その会に参加していた沖垣寛がそれを「師を慕ふて」三（『閃光』第五卷第四号、空知初等教育研究会、大正十五年四月）に記している。

一 蕃人がなぜ首を取るか。

全く復讐だ。その昔平地に広がつて居た蕃人を支那人が山に追ひ込んで圧迫を加へた。それに対する復讐がこの悪習となつたのではなからうか。

二 呉鳳がこの悪習をやめたいと思つた動機。

1 仕事を上する上の不便か。

2 人道の上から見てか。

これ文ではまだ命が惜しからう。

3 呉鳳には殉教的な彼の民族を自滅から救ひ出さうとする、熱い血潮が流れてゐたのではないか。

三 四十余首を年に一首づつ供へさせた。

蕃人の不平。

之を抑へた呉鳳の力。

忘れもするかといふを空頼みに、四十年間を抑へた力——。偉大。

四 首のなくなつた第一年。

四十年の不平ここに勃発——許さず。

第二年——許さず。

第三年——許さず。

この間に於ける呉鳳の苦心、この苦心を見ないで呉鳳の言葉を読んで駄目。

「それほど首がほしいなら……。」

の一語よく全篇を覆ふ。

蕃人もし虚心ならば、この一語に呉鳳が自からの首を渡ささうといふ意を読むべきに、——求むる処あればこそ——いかに赤衣着物は着て居ても呉鳳を見誤るとは。求むる処ある者は目は目その用を為さず耳また耳の用をなさず。ここらを教授者が真剣に切り込まなければ真の呉鳳は浮いて来ない。

人道を見る目。

さて、悲しい材料は涙にまで、おかしき材料は笑ひにまで。——子供は真剣な処で真剣に引いていつたら、泣くべき場合には泣かずには居られないもの。

ここでの取り扱いは、呉鳳の苦心を読み取ることが中心で、四十年間我慢した蕃人の心を読み取ることについてはまだ注目していないこと、また、死の前夜の呉鳳の心境を考えることについてもまだふれていないことの二点を指摘しておきたい。

三

昭和五年十月十六日と十八日に芦田は小樽市緑小学校において「呉鳳」の授業を行った。沖垣資料20「揚子江と呉鳳」(謄写印刷十七枚)は、その時の芦田の授業を記録したものである。記録者名は記されていないが、緑小学校の先生方が記録して、謄写印刷に付したものと考えられる。

この時の「呉鳳」の授業記録は、『垣内先生の御指導を仰ぐ記』(同志同行社、昭和七年七月)の「参考教授記録」にも収められていて、以前から知られているが、沖垣資料20「揚子江と呉鳳」と比較すると異同がある。芦田の、昭和七年三月六日付の沖垣宛書簡に「『垣内先生の御指導を仰ぐ記』を神武この方の出来事として、大成したいと思ひます。呉鳳の教授記一部至急御恵与下さい。」「『全集』第二十四巻」とあることからすると、芦田は沖垣資料20「揚子江と呉鳳」を沖垣宛から送ってもらい、それに手を加えて、『垣内先生の御指導を仰ぐ記』に掲載したと考えられる。そこで本稿では、実際に行われた授業を忠実に

記録したと考えられる沖垣資料20「揚子江と呉鳳」に基づき、昭和五年十月に芦田が「呉鳳」をどのように扱ったかを見てみたい。

十月十六日の第一時間目の授業は「もう、どうしても待つてゐられません。」という言葉に込められた蕃人の心情を読み取らせることをねらいとした授業であった。

この中に涙のしみでる様な言葉があるがどれかね？

……「それ程首がほしいなら」

そう、よく見つけましたね。もう一つあるさ。解るかね。

……「もうどうしても待つてゐられません」

そう、少しは蕃人の方も見てやらにやいかん。

蕃人だつて泣くにも泣けんのぢやぞ。そうぢやないか。

何年待つてゐたのかね？……四十余年。

そう、四十余年の間、もう一年、もう一年と止められて待つてゐたのだ。

一口に四十余年と言へば早い様ぢやが、君等は幾つかね？

……十一。

君等が生れてから今までの間のもう四倍ぢやぜ。

その長い間今年も駄目、その次の年も駄目と、来る年も来る年も待たされてゐたのだ。

蕃人は首幾つ持つて居たのかね？……四十余。

四十余年たつた首だ。汚ないくさつた首だ。気持のいゝものでもなからう。

そう言ふ風に四十余年も待たしておいたら、どうなると呉

鳳は思つてゐたのかね？……忘れるだらう。

忘れるだらうと思つてゐた蕃人が却つて忘れもせずに呉鳳に首をとらせてくれと何故言ふのか解るかね？……黙して答なし。

そりや、当り前さ。隣りの墓を見れば、今切りたての新らしい首が供へてあるのに、こちらを見ればぶくぶくさるか、つた汚い首を供へてゐるんだらう。早く新らしい首を御先祖様に供へて上げたいと考へるのは誰でも同じ事さ。

早くなくなればいい、早くなくなればいい、と不平で不平でたまらないのだ。

四十余年たつて首がなくなつてホツと一安心。

之で新らしい首がお供へ出来ると思つてゐたのに、もう一年、もう一年と三年も待たされたのだ。

それで蕃人が呉鳳に「もうどうしても待つてゐられません」と言つた。このどうしてもの中の蕃人の気持を考へてやらにやいかん。でないで蕃人がかはいさうだよ。

「それ程首がほしいなら」も涙なくしては読めない言葉だが、「どうしても待つてゐられません」といふ蕃人の心持

も涙なくしては読めない言葉だぜ。

芦田はまず「涙のしみでる様な言葉があるがどれかね？」と問いかける。児童からは「それ程首がほしいなら」という反応があるが、「そう、よく見つけましたね。」と受け、「もう一つあるさ。解るかね。」と転じ、「もうどうしても待つてゐられません。」を引き出す。そして、四十余年の間、待たされ続けた

蕃人の心情を説いていく。

芦田は『国語読本各課取扱の着眼点尋常科第四学年』（芦田書店、昭和三年七月、『全集』第十四巻）において、「首を取らうとする蕃人、それを取らせまいとする呉鳳、そのいきさつを真に見ようとするには蕃人の心持を忘れてはならない。」と述べているが、この授業はそれを実践しているといえよう。

十八日の第二時間の授業は、次のように行われた。

一寸本を見てごらん。

「それ程首がほしいなら……」の所をよみ

たゞ一つだけ取ることをゆるしてやるぞ。翌日

翌日？……明日。

明日までに夜があるぜ。

蕃人に明日まで待てと言つて、その夜、役所から家に帰つた呉鳳は、どんな気持で居たかを考へなきやいかん。

明日はこの身の首を蕃人にくれてやらねばならぬ呉鳳はこの夜どんな気持がしたらう。

呉鳳には家内があるぞ。子供があるぜ。

年をとつても明日死ぬと言ふ夜の気持は余りいゝものではない。それを考へなさいよ。

明日は自分が死ぬのだ。家の者を集めてよく言ひきかせ、若し自分が死んでも決してさはぐではない。あはてるではないぞ。今に蕃人の困る時がくるんだ。

かうして過ごすその夜の呉鳳の気持を考へなさいよ。

翌日赤い着物を着て赤い帽子を深くかぶつて、之で蕃人に

斬り殺されるのかなあ。四十余年可愛がつた蕃人にと思つたら、行く時にはきつと嫌な気がしたらう。

だが蕃人どもはよるこんでゐたのだぜ。

明日こそ、俺こそ首をとつてやるぞと意気こんでゐたのだ。赤い着物をきても赤い帽子をかぶつてもあの格好を見たら、呉鳳だと解りさうなものだが、目のくらんでる人にはものが見えぬ。

蕃人共は今か今かと待つてゐたのだ。果して向ふから赤い着物に赤い帽子をま深にかぶつた人がやつてきた。

果して……とはどういふことか。

……やつぱり。

……言つた通り。

そう、やつぱり来たのだ。蕃人共は待ちかまへてゐたのだ。待ちかまへる？……身がまへる。

何時でも斬りつけられるやうに身がまへてたのさ。すぐに……と書いてあるだらう。

呉鳳目がけて刀をぬいて斬りつけ、首を取つて赤い帽子をのけて見ると驚いた。

声を上げて泣きました。……とあるね。

何故泣いたのか？そこを考へて見なくてはいかん。

蕃人の心持は？……悪いことをしたと思つた。

一人残らず泣いただらう。はじめて自分達の悪かつた事が解つたらう。

泣く間に何か解つた事があるだらうが？……声なし。

そこまでにわかる事があらうが？……

四十余年言ひきかせた呉鳳の心がよく解つたらう。

お前達のほしい首には御恩をうけた首があるぞ。

そんなものを供へて先祖が喜ぶか。

呉鳳の言つてきかせた心持が始めて解つたらう。

蕃人でもえらい。矢つ張り人間だ。

其の前……の其のは何？……呉鳳

前は？……神社の前で。

おことはりの仕様がなから神様にしたのだ。

呉鳳をまつた神社の前で。此の後は。

此の後？……の此のは何？……これから。

決してとかいてあるね。

ちかひましたは？……堅く心にきめた。

神様に約束した。

欲しい首の中に取つてはならぬものがあると言ふ事を始め

て蕃人共が知り、悪かつたといふ事が解つたのだ。

ここでは、死に赴く前夜の呉鳳の心境と呉鳳の首を取った後

の蕃人の心境とに焦点をあてて授業を行っている。

この授業はかなり問題がある。死に赴く前夜の呉鳳の心境の

扱いについては後にふれる。授業の後半で、芦田は、「お前達

のほしい首には御恩をうけた首があるぞ。そんなものを供へて

先祖が喜ぶか。」と言ひ、「欲しい首の中に取つてはならぬもの

があると言ふ事を始めて蕃人共が知り、悪かつたといふ事が解

つたのだ。」と説明している。しかし、蕃人は呉鳳の首につい

ては「ほしい首には御恩をうけた首がある」「欲しい首の中に

取つてはならぬものがある」ということを理解したのであるが、

そのことからただちに蕃人は首を取ることが「悪かつたといふ

事が解つたのだ。」というように一般化することはできない。

芦田の説明は分かりやすい説明のようであるが、飛躍している

といわなければならぬ。

以上、沖垣資料20「揚子江と呉鳳」によって芦田の授業の中

心部分を紹介した。

ここで、この授業記録と『垣内先生の御指導を仰ぐ記』に収

められた授業記録とを比較してみたい。この授業記録の「明日

までに夜があるぞ。」から「明日こそ、俺こそ首をとつてやる

ぞと意気こんでゐたのだ。」までが『垣内先生の御指導を仰ぐ記』

ではどうなっているかを示す。

前日との間に夜があるね。その一夜の呉鳳の心と、蕃人

の心を考へてみなければならぬ。くれるといつても、自分

の首だ。家内もあつたらう。死んだあとのことをこまごま

といひきかせ、決してさわぐではなぞといひつけたことだ

らう。かうして過すその夜の呉鳳の心の中は、いかに覚悟

はしてゐても気の毒だ。蕃人はただうれしくてたまらな

つただらう。明日こそ自分がまつさきに首をとつて、四十

余年の不幸をはらさう。この意気込を呉鳳の心にくらべる

と、生きるゝと死ぬの差だ。

沖垣資料20「揚子江と呉鳳」では、死の前夜の呉鳳の心境を

執拗に考えさせようとしているが、『垣内先生の御指導を仰ぐ

記』では、それがずいぶん簡潔になつてゐる。また、沖垣資料の「呉鳳には家内があるぞ。子供があるぜ。」という断定の表現が「家内もあつたらう。」となつており、さらに「今に蕃人の困る時がくるんだ。」という唐突な発言が削除されている。

四

昭和七年二月二十九日と三月一日に芦田は千駄ヶ谷尋常高等小学校において、「乃木大将の幼年時代」の授業を行い、垣内松三が参観した。垣内が芦田の授業を見るのはこれが初めてであつた。垣内は芦田の授業を見るとともに、授業後に講演を行つた。垣内はその講演の中で、芦田の「呉鳳」の取り扱いについてふれ、

象徴的機構といふは、「こころ」と「ことば」のつながりをいふ。かの前二者対立の融和止揚の世界である。昨年芦田先生に「呉鳳」の課の取扱を承る。本課は時間的結晶として二日にきはまる。即ち、先生は、「翌日」に着眼せられて、その前夜の呉鳳の心と蕃人の心を子供に考へさ、れる——呉鳳の感慨と蕃人の喜悦とを。同じ一夜のかうしたさまざまの心を。

これは叙述的機構でもなく、表現的機構でもない。即ち象徴的機構に立つての読方である。「翌日」はたゞの「あくる日」ではないのである。この課に於てははなはだ个性的な、即ち本課の中心、呉鳳の一身を犠牲にして蕃風をあらためようとする心を、いきいきと理會し得る鍵のことば

である。

こゝに先生十年の躍進を思ふものである。

(『垣内先生の御指導を仰ぐ記』)

と称賛している。

これで死の前夜の心境を考えさせる芦田の「呉鳳」の扱いが、垣内という理論家によつて承認された格好になつた。

五

昭和十二年九月二十五日と二十六日に芦田は静岡県富士根小学校で授業を行つた。この時、芦田の高弟である鈴木佑治と安田孝平も授業を行い、鈴木は『小学国語読本』巻八の「呉鳳」を扱つた。その授業を青山廣志が記録し、『同志同行』第六巻第八号(昭和十二年十一月)に掲載した。

鈴木は「二はなしあい」の二時間目の授業で、「一よむ・二はなしあい・おさらへー・三よむ・四かく・五よむ・六とく・七よむ」という芦田の七変化の教式に則つて行われている。

鈴木は「二はなしあい」で、第五段の復習を次のように行つている。

五段目に何を書いて居つたか。

○翌日

翌日——、次の日といふ事だね……

もうどうしても待つて居られないといつた日と翌日の間に何があつた、と先生はいつたか——

○夜がありました

夜と朱書されつ、

夜がありました。この夜は蕃人どもにとつてはそれはねむることの出来ない位うれしい夜であった。今まで待つて待つて待つたあした首を取ることが出来る日、それはうれしくつてうれしくつてねむることが出来なかつた……。

○「……」

呉鳳さんはその反対にあしたは命を投げ出さなければならん、呉鳳さんにとつては、とてもかなしい日であつた。呉鳳さんはやつぱりねむられなかつたらう。——蕃人はうれしくつてねむられない、呉鳳さんはかなしくつてねむられない……

また、「六とく」で、死の前夜の呉鳳の心境について、次のように述べている。

呉鳳さんはね、其夜赤い帽子赤い着物を出して揃へたとき、それを見たときつらかつたらうと思ふ。この赤い帽子を一度冠つて外へ出たら自分の首はなくなるのだ、この着物を着てこゝを出かけて行つたらもう再びこゝに帰つて来ることは出来ないのよ。死んで行く人が白い着物に着替させられて、あの世に旅立たせられるやうに、これが自分の死んでいくすがたか——赤い帽子に赤い着物を揃へたとき、呉鳳さんはそれはどんなにかなしかつたか知れない。これを着て出たらもう帰つて来る時がないのだ、と思つたに違ひない。

さらに、蕃人が首取りを止めたことについて、

それ以来、——阿里山蕃の人たちは決して人の首をとつたことはない。わかつたんだね。取つてならない首を取つて見てはじめてわかつたのよ。首を取つてゐるうちにはかういふ大事な人も殺す場合があるんだナ、だつたら首を取ることはわるいことだ、しまつたことをした、今後は首を取るまい、決してとるまいと決心をした。

と説明している。

鈴木は、芦田と同じく死の前夜の呉鳳の心境を取りあげて説明している。また、蕃人が首を取らないと決心したことについて、芦田と同じく「首を取つてゐるうちにはかういふ大事な人も殺す場合があるんだナ、だつたら首を取ることはわるいことだ」と説明している。鈴木は明らかに芦田の授業をふまえたものであるといえよう。

六

昭和十三年十月六日と七日に、北海道庁と札幌・函館・旭川三師範学校共催の北海道三師範学校連合初等教育研究会が開催された。この研究会では、読み方、算術、理科の研究授業と三十一名の発表者による研究発表が行われた。読み方の研究授業を行ったのは札幌師範の斎藤七郎治で、教材は『小学国語読本』巻八の「呉鳳」であつた。

この研究会の正式な記録としては北海道庁編『北海道三師範学校連合初等教育研究会研究録第一輯』（北海道連合教育会、昭和十三年十月）があるが、ここには三十一名の研究発表が掲

載されているだけで、研究授業の記録は掲載されていない。
 そこで、石附忠平「三師範附属連合研究会の記」(『北海教育評論』昭和十三年十一月号)によって、その時の斎藤の授業とそれに対する批判とを見てみる。

斎藤訓導の授業は尋四・呉鳳の課の第一時―通読段階の指導(全文)、第二時―精読段階の指導(前半)の後を受けた、第三時―精読段階の指導の時間で、それは第四時―味読応用段階の指導(全文)を後に控へた所のものであった。さうしてその授業の進行は一、文字練習調査 二、通読、前時精査の分の仕事を終へた後、本時分である文章後半の精査に入り、それを次の板書事項に纏めたのであった。

四十年はいつの間にか過ぎて

12	なだめた	11	今日こそ新しい首
14	それ程首がほしいなら	13	もうどうしても
15	果して	16	忽ちに取つてしまった
17	意外にも	18	声を上げて泣いた
19	神に	20	それ以来

首取の風習がふつつりとなくなつた

斎藤訓導の授業はその人の人格をその儘に語る如く、少しのケレンもヤマもない、篤実明克とも云ふべき授業であつた。

これだけでは、斎藤の授業の詳細については分からないが、石附が「少しのケレンもヤマもない、篤実明克とも云ふべき授業」と評しているように、言葉を丁寧押さえていく地味な授業であつたというこはうかがえよう。

斎藤自身も昭和五十七年一月に、この時の授業を回想して、
 当時の中等学校の入学試験を受ける六年生の子どもたちが、学校が終わると今の塾のような受験塾へ通うのは、札幌ではずいぶんいたんです。そこでもつぱら何をやっているかというと、漢字の書き取り、語句の意味、文章のまとめ方の勉強で、文章の意味に立って人間の心に響くようなものは全然ないんです。一つの作業みたいなものだったのですね。私は附属にいたせいもあつてか、国語教育というもの、学校で教えていることと塾で教えていることがこんなに隔たつていいものだろうか、学校は当然、この塾の中でやっていることをしなければならぬのではないか、という感想を非常に強く持ちました。

と指導の基本方針について語っている(北海道教育大学札幌分校特定研究グループ報告書『戦後北海道における教育研究の展開と現況』昭和五十八年三月。この資料は小林和彦先生のご好意により読むことができました。記して謝意を表します)。

この授業に対し、札幌市中央創成小学校校長の飯田広太郎と

小樽市緑小学校校長の沖垣寛が次のような批評を加えた。

之に対し座談会に入つてから飯田中央創成校長が、議長である上山札幌校長に指名されて批評の役を振り当てられた。飯田校長曰く、「此の呉鳳の課は文章そのものとしてはさして難解でないから此の附属の児童等では四時間といふ時間を取るのには長過ぎはしないか。寧ろ二時間位に切詰め、細かな語句の詮議や平板的に文章を追ふて行く吟味を略して、全文に響くポイントに向つて集中的に吟味を進めた方が此の呉鳳の文を児童の精神に生かす所以ではなかつたか。四十年の努力も未だ酬いられず、挺身蕃人の刃に先づ自身の生命を供さなければならなかつた呉鳳の死の前夜の心境はどうであつたらう。此の文の記述面の背後にある精神、之を感応することによつて全文そのものがさながら生きて来るのであるが授業者のその辺の取扱が希薄であつた。要するに此の種の文章の取扱には濃淡が必要である。飛躍が必要である。今日の授業は聊かさういふ点が希薄で平板に流れはしなかつたか。」

沖垣校長が指名されて其の批評の後を受けたが、同氏は更に呉鳳が死の前夜の心境を深究することの必要を力説し、氏の抱懐する呉鳳の心境解剖を縦横に披瀝した上此の課を取扱つた際の此の心境問答に対し児童の答へた実例を挙げて此の課を考へることの方向と深さを自証する所あつた。氏の所論に賛する者も賛せざる者も、その流暢なる調音の美しさ、措辞の練達さに、或一つの芸術を聴くが如く

に聴入つた。

飯田が「挺身蕃人の刃に先づ自身の生命を供さなければならなかつた呉鳳の死の前夜の心境はどうであつたらう」と言い、沖垣が「呉鳳が死の前夜の心境を深究することの必要を力説した」というのは、昭和十二年九月の静岡県富士根小学校における鈴木佑治の授業と同じく、明らかに芦田の「呉鳳」の取り扱いを念頭に置いてのものであつた。

この二人の批判に対して、札幌市北九条小学校の桜井忠から異議が出る。桜井はこの時、「読み方指導の実践形態」という研究発表を行つた。

桜井忠氏の発表は「読方指導の実践形態」といふのであつたが、その要旨は教授の形態には 一 叙述的機構型 二 示現的機構型 三 象徴的機構型 の三つの型があつて、教師の志向と嗜好に依つて、その三型の孰れにか偏し勝ちのものである。けれども授業の本態は此の三型を偏頗なく遂行する事によつて初めて完全性を持つものである。故に我々は此の三型を偏することなく具有することに努めなければならぬといふのである。所で同氏は発表の終に次のやうな意見を附加へた。曰く「然し授業が孰れかに偏向を持つ場合、最も危険なのは象徴的機構型の徒に児童をして文を離れて空間を読ましたり、文意深究に名を藉りて、心理問答や人生問答に終始する授業である。そして最も危険性の尠いのは文中の言葉と文意の解釈に忠実な叙述的機構型の授業である。本日の斎藤訓導の授業は正に此の叙述

的機構型の授業で、誰が何処で如何な児童を相手としても誤のない授業である。」云々。聴く人々は此の言葉に聴き耳を立てた。一瞬場内に或る気流が動いた。

「空間を読ませる」ことを批判し、斎藤の授業を弁護する桜井の発言は、昭和五年十月の芦田の授業と、それを「象徴的機構に立つての読方」とした垣内の称賛を念頭においてみると、芦田の読み方に対する批判でもあった。

桜井の発言はこれで終わらない。桜井はさらに質問討議の時に、次のように質問する。

さうしてこの研究会の質問討議も略、終りを告げようとした時、兎に角参会者の視聴を峙てさせた質疑が出た。それは桜井訓導から沖垣、飯田両校長に発せられた質問であった。(略)

桜井訓導は云ふのである。「往々此の『考へる』といふことを考へすぎた場合、その『考へる』がことば一文そのものを離れて架空な『考へる』に行つて了ふのを見る。さうして授業の實際に於ては此の架空な『考へる』に或は教授者の話術を加へ、或は誘導的質問を發して授業を賑やかにし以て、それを教授の真髄を得たりとする、云はば落語的教授と云つていいやうな授業がある。読方教授に於ける『考へる』を一体かやうな『考へる』にまで上昇遊離させる事に対し沖垣校長の持して居られる見解を伺ひたい。」

(略)

此の問に対し沖垣校長が先づ起つて答へる。「桜井君が

問はれる『考へる』といふことの意味は決して言葉、文そのものから離れて考へる所の『考へる』ではない。何処迄も夫れに即応した所の『考へる』である。世間往々『考へる』といふことを読本の文を離れ、言葉の取扱や文字、語句の取扱を離れて、人生問答に騰昇するが如くに思ふやにも聞くが、之は非常に間違つた事であつて我々の読方教育の『考へる』は何処迄も古人も云ひ又先程桜井君も口にされた所の『ことば』『こと』『ころ』の三者相関響応の意味に立脚しての『考へる』である。丁度良い機会でもあるから茲にそれを明瞭にして置きたい。」

この研究会における飯田・沖垣と桜井の応酬は以上であるが、この応酬を契機として、これ以後『北海教育評論』誌上において、読み方教育はいかにあるべきかについて論争が続くことになる。この論争については、稿を改めて論じたい。

七

昭和五年十月、芦田恵之助は緑小学校において「呉鳳」を扱ひ、「蕃人に明日まで待てと言つて、その夜、役所から家に帰つた呉鳳は、どんな気持で居たかを考へなさいか。明日はこの身の首を蕃人にくれてやらねばならぬ呉鳳はこの夜どんな気持がしたらう。」「年をとつても明日死ぬと言ふ夜の気持は余りいゝものではあるまい。それを考へなさいよ。」かうして過ぐすその夜の呉鳳の気持を考へなさいよ。」と死の前夜の呉鳳の心境を執拗に考えさせ、「行く時にはきつと嫌な気がしたらう。」

と結んだ。そしてこの扱いを垣内松三は「象徴的機構に立つての読方」と称賛した。さらに昭和十三年十月、北海道三師範学校連合初等教育研究会において、飯田広太郎と沖垣寛は斎藤七郎治の「呉鳳」の授業を批判して、死の前夜の呉鳳の心境を扱うべきことを主張した。

しかし、この教材を扱うにあたって、死に赴く前夜の呉鳳の心境を考えさせることは、適切なことかどうか。

「それ程首がほしいなら、明日の昼頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」と言つて、死ぬことをすでに覚悟した人間の心境を、前夜という一点に限定して尋常小学校四年生に考えさせることは、児童の思考の幅を極めて狭くしてしまい、さらに児童の思考をこの教材から遊離させてしまう危険性がある。

そもそも、尋常小学校四年生に、死の前夜の呉鳳の心境を考えさせるというのはかなり無理があるのではなからうか。芦田も授業においては「行く時にはきつと嫌な気がしたらう。」と言っているが、『小学国語読本と教壇』巻八においては「呉鳳は決心して家に帰つた。おのが亡きあとの家の整理をした。家人にも一切言聞かせた。思ひおくことさらになきまでに至つて、道に殉ずる呉鳳の心は澄渡つた。」と言ひ、芦田自身の読みも揺れているのである。

このように扱いに問題のある、死の前夜の呉鳳の心境ということに芦田が着目したのはどうしてであらうか。

すでにふれたように「呉鳳」は中田直久『通事呉鳳』に拠つ

ている。新田寛編『小学国語読本原拠集成』によると、「通事呉鳳」には死の前夜の呉鳳について、次のように記されている。

呉通事は、支廨の従僕を率ゐて番仔潭庄の公廨に帰り、家廟に告別し、家眷を招いて詳に事由を告げ、身後の経略を訓示す。一家驚愕し、勸むるに先づ府城に避け、知県に告げて後に之が計を為さん事を以てせしむ。呉通事断として応ぜず。八月十日曉霧まだ齋れぬ山谿をたどりて、古稀の老軀を社口庄の支廨に運び行けり。(略)

呉鳳は多年の経験によりて、蕃情を知悉せり。かねて斯くあらん事を察し、告別に臨み家人に命じて曰へり。「予の死を聞くも決して哭する勿れ。直ちに屍を収むる勿れ。恐らくは蕃人の視ふありて、為に傷害せられん。三日を経て別状なくば往きて収めよ。」と。又令して曰ふ、「紙人の刀を持ち馬を躍らし、手に蕃人の首を提ぐる予の像を作り、之を柩前に焚きて、当に颯言して云ふべし。呉鳳半生蕃人の馘首の残暴を革めんと欲し、百万論説するも聴かず、恨を呑んで死せり。其の靈天に訴へ、災殃を蕃社に降して予遺なからしめむ。」と。

そして芦田も中田直久『通事呉鳳』を読んでいた。それは、『国語読本各課取扱の着眼点尋常科第四学年』にこの本の要約を記していることから分かるし、『小学国語読本と教壇』巻八に「通事呉鳳といふ書の中に」と記していることから分かる。緑小學校での授業における「呉鳳」には家内があるぞ。子供があるぞ。」という発言や「家の者を集めてよく言ひきかせ、若し自分が死

んでも決してさばぐではない。あはてるではないぞ。」という発言は、『通事呉鳳』を読んでいるからこそその発言である。

芦田は『通事呉鳳』を見て、死の前夜の呉鳳の心境というところに着目したと考えられる。

おわりに

昭和五年十月、芦田は緑小学校の「呉鳳」の授業において、死の前夜の呉鳳の心境を追究したが、それは死の前夜のことを記した『通事呉鳳』に影響されたものであると考えられる。しかし、死の前夜の呉鳳の心境の追究は参観者の意表を突くものではあっても、この教材の読み取りに有効なものであるとは言い難い。

昭和十三年十月の北海道三師範連合初等教育研究会において、斎藤七郎治の「呉鳳」の授業に対し、飯田広太郎と沖垣寛の両氏が、死の前夜の呉鳳の心境を扱うべきことを主張した。それは「呉鳳」という教材の指導にあたっては呉鳳の心境をもう少し丁寧に扱うべきであるという点においては妥当な指摘であったが、死の前夜ということに限定して提起したのは、原拠に影響された芦田の授業に引きずられたものであったといえよう。